

東日本大震災から2年

～みんながスポーツで笑顔になれる、そんなニッポンをつくろう。～

震災後、海外からもたくさんの支援の声をいただきます。その中から、ある一人の柔道家をご紹介します。

イタリア ミラノに道場を構え、杖をつき真っ白な道着に袖を通す、誰からも慕われるお爺さん先生がいます。柔道の創始者である嘉納治五郎師範の“教育理念”に感銘を受け、人生のほとんどの時間を費やし柔道を研究されてきた方です。

一昨年の震災後、いち早く連絡をくれました。その夏、被災地の柔道家をイタリアのキャンプへと招待してくだり、たくさんの思い出をプレゼントしてくれました。

二度目の夏がやって来ました。今年も彼らを招待し、再会を待ち詫びていた矢先の出来事でした。体調が悪化し亡くなられたのです。息を引き取る間際「私の代わりに彼らを大切に迎えてあげてくれないか」と言い残されていたのです。生前、「私は日本の柔道からたくさんの事を学ばせてもらった。だから日本にお礼がしたい。」そうおしゃっていました。

情熱が糧となって世界を繋ぎ、私たちは自他共栄しながら希望を描くことができる。また一つ、忘れかけていた大切な心を教えてもらいました。

谷本歩実

東日本大震災から2年

～みんながスポーツで笑顔になれる、そんなニッポンをつくろう。～

震災直後、何か私にできることはないかと考え、アスリートのネットワークで募金をし、寄付させていただきました。その時のアスリート達は皆私と同様に、自分達に何かできることはないかと逸る気持ちで迅速に行動しました。暫くして復旧が進んでいき、時間は流れていきました。そんな中、被災地に対してほとんど何もできていない私は、忸怩たる思いで過ごしていました。

あまりにも大きな被害を受けた子供たちに何と言葉をかければよいのか、どんな態度で接したらよいのか自信もありませんでした。こんな大変なときに私が行って喜んでくれるのだろうか。一方で、私が一緒に子供たちと走ることで、少しでも楽しんで元気になってもらいたいと強く思いました。このように、震災後に初めて福島を訪れるまでに、自分の中で葛藤していました。いざ訪れてみると、そんな私の心配はよそに子供たちは元気な笑顔で私を迎えてくれて、一緒に楽しんでくれました。ところが、訪れたのは真夏にもかかわらず、日焼けしていない白い肌や少し走るとすぐに息があがる姿を見て、やはり現実はまだまだ厳しく、復興への道は果てしなく遠いのだと痛感しました。それから何度か被災地に足を運びましたが、こちらが気をもむよりも、私自身が元気な姿で一緒になって活動することが大切なのだと思うと気持ちが軽くなりました。

昨年の神戸マラソンでのスタートセレモニーにおいて岩手県立高田高校音楽部と神戸の高校合唱部・コーラス部による合同合唱が行われました。同じ被災者として思いが通じ合った合唱には心を打たれました。その生徒たちは以前から交流しており、セレモニー後も別れを惜しみ涙する生徒たちもいました。

この震災や被災地を訪れたことを通じて、普段の生活に追われて忘れがちな人との絆や大切な人への思い、人への感謝、思いやりなど大切なことを再認識することができました。私たちスポーツ選手にできることも再認識できました。震災復興の長い道のりの中で、私が役に立てることがあればこれからも継続してやっていきたいと思えます。

朝原宣治

東日本大震災から2年

～みんながスポーツで笑顔になれる、そんなニッポンをつくろう。～

東日本大震災から2年がたちます。私はこの2年間、東北のいろんな土地に行き水泳教室など様々なスポーツイベントに参加させていただきました。そこで、感じることは『スポーツの力』です。イベントに参加されている方々は、とても楽しそうにスポーツをされていました。もちろん全力で取り組んでいるので真剣ですが、真剣な表情と同じくらい笑顔を見る事ができました。

震災直後は、東北で大変な想いを毎日されている皆さんに、スポーツは本当に何かの力になるのだろうか？と悩み、考えた時もありました。でも、実際にいろんな所で皆さんと一緒にスポーツをする事で、スポーツには元気になれたり、笑顔になれる力があるんだと皆さんの姿を見て感じるようになりました。

これからも『SPORTS JAPAN アンバサダー』の一員として『みんながスポーツで笑顔になれる、そんなニッポンをつくろう。』を心に持って、スポーツを通して皆さんの支援を行っていきたいと思っています。

柴田 亜衣

東日本大震災から2年

～みんながスポーツで笑顔になれる、そんなニッポンをつくろう。～

「生活不活発病」という言葉をご存じでしょうか。

外出や運動の機会が少なくなって生活が‘不活発’になると、関節が硬くなったり、内臓の働きが弱くなります。体がだるくなると、ますます運動をしなくなり、さらに体調が悪くなってしまふ、という悪循環につながりかねません。長期にわたる狭い仮設住宅や、知り合いのいない避難先で地域コミュニティとのつながりが作れない方の多くが「不活発」になってしまい、体調が悪くなりがちの方が数多くいらっしゃるそうです。

そんな時だからこそ、スポーツをする機会がたくさん必要です。共に体を動かし、汗を流すことで体と心がほぐれ、笑顔が生まれます。今年は例年よりも雪が多く、寒さも厳しいので家にこもりがちですが、雪や氷などの自然条件を活用し、雪上や氷上でのスポーツを楽しみたいと思います。

これからも、みなさんと共にスポーツを楽しむ機会を多く持つとともに、私自身も新たなチャレンジを続けることで、前向きな気持ちを持ち続ける大切さを伝えていけるように頑張ります。

大日方邦子

東日本大震災から2年

～みんながスポーツで笑顔になれる、そんなニッポンをつくろう。～

震災から2年、改めて被災地復興に対して「スポーツで何ができるのか？」が問われていると感じています。

震災後、何度か被災地に伺わせてもらい私が感じたことは、被災地の復興に必要なのは「街の元気や灯り」であり、その源となるのは、「子供達の元気や活気」だということです。元気や活気があふれている姿とは、まさに「子供達の笑顔」だと思います。その「子供達の笑顔」を見て、周りにいる多くの人々に「笑顔」が生まれる。そんな素敵な笑顔のつながりが、計りしれない大きな力を生み出し、復興への活力になっていくのだと信じています。

これからも SPORTS JAPAN アンバサダーとしてスポーツを通して被災地そして日本全国の元気の源になる「子供達の笑顔」につながる様な活動をしていきたいと考えています。

大畑大介